
ラストライフ・オンライン

蜜柑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラストライフ・オンライン

【Nコード】

N2332BA

【作者名】

蜜柑

【あらすじ】

一人のゲームプログラマーの妄執から始まったフルダイブ式VRMMO ラストライフ・オンライン 通称LL。VRMMOとして最高のクオリティと言われたそのゲームが、遂に正式サービスを開始した。

だが、LLは誰一人としてダイブアウトを許さない、この世界での死を現実での死と同義とするデスゲームになった。ダイブアウトするための唯一の方法はゲームクリア。

現実への帰還へ3万人の人々の冒険が始まる。

所以

最初に言っておこう。

このデスゲームは一人のゲームプログラマーの妄執から始まった。

いがたひろひと
井形尋仁は所謂「天才」であった。

ゲームプログラムだけでなく、シナリオもシステムも何をさせても一流。

ゲームの範囲にとどまらず、彼のデザインセンスは現実でも最高と評価された。

そんな彼を誰もが憧れ、嫉妬した。

そして、孤高の人としてもてはやされた。

だが、そんな彼をALS 筋萎縮性側索硬化症が襲った。

ALSは全身の筋肉が萎縮し、その力を低下させていく病気であり、最終的には呼吸筋に及び、人工呼吸器を使用しての延命が計られる、現在の医学をもつてしても治療が困難な病気である。

脳の活動に影響はないとされているが、体の表現する力が失われてしまい、今までのような生活が少しずつできなくなり、表現の全てを失うことに井形は恐怖した。

そして、診断を受けて数ヶ月の間、全ての活動を休業する。

数ヶ月たった後、彼が最期にと始めた仕事はフルダイブ式VR MMOの製作だった。

製作当初から公開されたそのゲームの名前はラストライフ・オンライン 通称LL。

彼はひたすらにゲームの製作を続けた。睡眠や休息をとることは一度としてなかった。

彼がβテストの期間中にインタビューに対して答えた時に言って

いた。

「いらないものは全てが終わってからでいい。これが私の最期なのだから。」

装備や世界のデザインからストーリーなど全てを一人で設計し試験運用^{テスト}さえも一人で行った。

彼の全てをこめた最期の作品は、今までゲームに触れたこともない人達さえも巻き込み、年齢や性別を問わず、多くの人がその世界に触れたいと願った。

その結果、βテストの応募者は1万人の募集に対し3000万人を超え、β参加権が非合法に高くで販売されたと言われている。

彼の財産と彼の才能、その全てを込めたそのゲームの完成度は圧倒的で、βテストにおいてバグが一度も確認されることなく、CMとしての効果しかなかった。

それから数ヶ月、ついに製品版の販売が行われることとなった。

多くの購入希望者がいたが、井形はインターネットでの抽選販売とし、初回販売を3万個に限った。

当選者は幸運だったのだろうか、不幸だったのだろうか。

それは、彼らそれぞれにきかなければわからない。

ダイブイン画面

――。

サーバーにダイバー登録が完了しました。

種族、キャラクターメイキングに関しては今後変更できません。

キャラクターメイキングに入ります。

――。

キャラクター及び種族の登録が終わりました。

クラスセレクトに入ります。

――。

クラス「」に決まりました。

チュートリアルを行いますか？

――。

？はい。いいえ。

それでは、チュートリアルを開始します。

――。

――。

それでは、チュートリアルを始めるとしよう。

この世界の活動は基本的に現実の活動と変わらない。歩こうと思えば歩ける。物をつかもうとすれば掴む。時間がたてば空腹感を覚えるし、疲労感や眠気も発生する。

現実と変わらないここはもう一つの幻^{げんじつ}実といえる。ただし、ステータスが存在し、そのステータスが許す動きしかできない。

現実で陸上の選手であろうと、ここではAGIが低ければ速く走れない。

戦闘に関してもステータスの範囲内で避けるも防ぐも自分でやるしかない。

ただし、それをアシストしてくれるのがスキルだ。

バックステップのスキルを念じれば、後方に普段ではできないよ

うな疾風のようなステップができる。二段ジャンプでは空中にいてもさらに空気を蹴り上がることができる。

攻撃系スキルはステータスに合わせて動きをアシストしてくれる。アビリティーはスキルの成長にあわせて習得する。

槍術スキルを上昇させることで習得するアビリティー デイスラストを発動させると二段突きが行われる。

スキルやアビリティー、クラスの成長はプレイヤーのプレイスタイルに合わせて変わっていくので心配ない。

決めるべきはステータスの配分とクラスチェンジ時の同意か拒否のみだ。

さて、空腹感などの対処法についても説明をしよう。

しかし、これもまた現実と一緒だ。

食べればいいし眠ればいい。

調理も出来るし、栽培や釣りも可能だ。

武器の製作もできる。

が、これについては長くなってしまうので興味があれば、ギルドに行ってみると良い。

困ったら近くのダイバーに聞いてみるのもいいがギルドに行くといいのも良い方法だ。

それでは、ダイブインするでしょう。

この世界が貴方にとって素晴らしいものになることを願う。

――。

サービス開始当日

今日、8月10日はLLのサービス開始日だ……。

そんな日だっていうのに、学校に呼び出されている。

なぜなら、俺、つきかげかなた月影彼方は高校3年生で進路相談を受けなければならぬからだ。

β版からのダイバーとしての知識を活かして、スタートダッシュを決めて、LL最強を目指そうと思ってたのに……。

でも、両親が死んでからずっと2人で生きてきた姉さん、つきかげひよ月影氷花は、大学の夏休みを活かして準備万端で、昨日なんか4時間もLLのレクチャーをさせられた。いつも支えられてばかりだった姉さんをサポートできて嬉しかったのは秘密だけど。

そんなこんなで家を出なければいけない時間になった。

「姉さん行ってくるよ。」

と言うと、最近ショートカットお試し中の姉さんは玄関まで来て「いってらっしゃい。遅くならないように帰ってくるのよー。」と送ってくれる。

いつもの姉さんを知ってる人には信じられないある意味危険な格好だが、それがいつもと変わらない日常だった。

近くの駅に向けて歩きながらサボりたい気持ちが膨らんでくる。

でも、今日ダイブインできるだけでも奇跡なのだ。

当選発表の日に、俺は当然の様にLL初回版のハズレの通知をいただいた。

わざわざ占ってもらい、画数的に良いと言われた祖父の住所で応募したっていうのにあの占い師めっ……。

そんなわけでβ版で仲良くなったダイバーにチャットでそれを伝

えた。

確かこんな感じだった。

――。

「ははー。やっぱり落ちちゃったよ。」

「えっ！？なんで！？」

「なんでって応募数やばかったし、仕方ないんじゃないかな。」

「そっそうだね・・・。」

――。

沈黙が痛い。そいつは当然の様に当選したらしい。

「あのさ。一個余ってるんだけど使う？」

！？

「余ったってどういう！？いるよ！いるいる！欲しいです！ご主人様！でもいいのか？」

「ご主人様って・・・これか？これが欲しいのか？・・・言わせんな！恥ずかしい。すぐ送るから、住所教えて。」

そして、サービス開始前日、つまり昨日届いた。お礼はゲーム内でしっかりさせて貰おう。

そういうことなので、学校にはしっかり行こう。

――。

職員室の前の廊下にはまばらに学生がいた。

進路相談も佳境らしい。

俺の前のやつの相談も白熱してる様だ。

そして、そいつが出てきたのは予定の20分後だった。

廊下に出てくるなりこっちに気づいたちよつとだけ人より背の高いポニテールが似合っているそいつ、幼馴染の環状葵かんじょうあおいが声をかけてきた。

「かなたあゝ。進路相談終わったらうち来てよね」

「ばかいうなよ。今日は敬愛する井形尋仁いがたひろひとの最終作をやるって決めてるんだ。」

「絶対来なさい！5分で済むから。」

「はい。行かせていただきます。」

俺とコイツはこういう関係だ。昔からこうなのだから仕方ない。面倒見のいい優しい奴だけど口が多少悪い。

「如月君。入りなさい。」

「じゃあ家で待ってるからね。」

「はいはい。」

一一一。

デスゲームの始まり

進路相談は予定より長引いた。

俺は姉さんを支えたい。

両親が死んでから3年間、姉さんは高校生でありながら一人で俺を育ててくれた。

祖父から同居の提案もあったが、両親の思い出が残るうちに2人でいた。

隣の環状家のひと良くしてくれたおかげで2人で幸せだった。

だけど、逆に言えば将来が具体的に見えない俺には相談するだけのものが無かった。

結局のところ、進路相談は少しの進展も無く終わった。

今のところ、料理ができて家事もできる自分に不十分を感じていない。

「さて、帰るとしますかー。」

――。

帰る途中にいつも交番の前を通る。家から一番近い駅の横にあるから仕方ないけど、悪いこととしてなくても緊張してしまう。

横目でチラッと中を見てしまうのは癖になっている。

しかし、いつもの平穏無事な様子では無かった。

いつも茶をすすりながら和んでいるそろそろ定年かと思っているおじいさんな警察官が爆発物を見るかのような目で俺も知っている箱を睨みつけていた。

LL初回版の箱だ・・・。

嫌な予感がした。

確かに希少価値で数百万ぐらい余裕で行くんじゃないかというゲームだから扱いに困るだろうけど・・・。

そんな悪い予感の数分後に真実を教えてくれた。

町が騒がしい。

特に、町の中で最も大きいモニターを掲げたデパートの前。人だかりができています。

普段は流れているニュースに見向きもしてもらえないそれは今日は違った。

モニター内のニュースキャスターも見ることから慌てている。

「緊急放送です。ラストライフ・オンラインというゲームにおいてダイブアウトできない、ゲームをやめられない状態になっています。電源を落とすなど強制的にダイブアウトさせた場合、ダイバーの脳に障害が発生し、脳死する事があります。絶対にダイブアウトさせず警察に連絡をお願いします。」

ニュースキャスターの前にさらに新しい紙が渡された。

「新しい情報が入りました。このゲームの製作を行った井形尋仁^{いがたひろひと}・

・容疑者からの映像が届いている様です。」

――。

「皆さんこんにちは。井形尋仁です。3万人のダイバーを私が預かりました。しかし、彼らには飽きる事のない生活を提供しますよ。ただし、ダイブアウトする事は誰一人として認められません。ダイブアウトするためにはゲームをクリアするしかない。といってもゲーム内で死亡すると現実でヘッドギアから死のデータが送られるので気をつけていただきたいものです。死んだと脳が認識すれば人はほんとに死ぬのですよ。ヘッドギアやゲーム機に衝撃を加えるのもオススメしません。ちなみに、私を捕まえて止める事も出来ま

せん。なぜなら私は誰の手も届かない世界に逃げるからです。」

映像はそこまでだった。

尊敬するその人の姿とその声を聞いてやっと俺は理解した。

デスゲームが始まったのだと。

「姉さんを止めないと！」

――。

「姉さん！」

姉さんの部屋の扉を蹴破る勢いで開けて入ると、ベッドの上に静かに眠っている姉さんがいた。

ヘッドギアで顔が見えない。

姉さんは既にLLの虜囚になっていた。

――。

そして、悲しみに浸る間も無く俺の頭は解答を出していた。

携帯電話で110と押し、テーブルの上に放り投げた。

そのまま、自分の部屋に戻りゲーム機に電源をつけ、ヘッドギアを被りベッドに倒れこんだ。

目の前が真っ暗になりいつもと違う注意書きが表示される。

「ラストライフ・オンラインに絶対にダイブインしないでください。ダイブアウト出来なくなっております。また、現在、ダイブイン制限をかけようとしています。成功しておりません。ダイブインしない様にご注意ください。」

それを無視してLLを起動した。

薄れゆく意識の中で、隣の家までが騒がしい事に気づく。

俺が来ないから怒っているんだろうな。すぐには行けなさそうだ。

ごめんと口に出してつぶやいたところで俺の現実での記憶は消失した。

幻実へ

キャラクターメイキング画面が目の前に広がった。

自分の前に自分と瓜二つのキャラクターが表示される。

もともと自分と似ていないキャラクターに出来ない様にカスタムの範囲は狭いが、姉さんにわかりやすい様に種族もヒューマという人間型にした。

狼人風のウォーウルフアーが好みだが、ワイルドさを加味すると俺にならない気がした。

猫人のキャティーや幼児体型のチューマは問題外だ。

ここで猫耳の姉さんをイメージするあたり、こんな状況とは思えない落ち着きぶりだ。語尾はにゃんてお願いしたい。

ー。

クラスセレクトに入ります。

クラス、要するに仕事の様なものだ。

鍛冶や調理などのクラフトなど色々なものがあるが、姉さんを探すためには戦闘系のクラスがいいだろう。自分の性格的にクラフトが向かないという部分も多々ある。

姉さんのことだ、クリアに向けて既に活動を開始していることだろう。

そう考えるとクラスやスキルを上げるのに不利なクラスはやめた方がいい。

デスゲームになったということは、クラスあっぷPT、つまりクラスを上げるためのチームのことだが、リスクの少ない遠くから攻撃するタイプのクラス、例えばアウトファイター系の槍とか弓が流るりそう。

その分余ってしまったってPTに入れない確率があがる。

それなら、HP少ないくせに、高威力で敵に憎まれやすい二刀流のディソーダーや攻撃魔法のソーサラーは需要があっても供給がないからクラスあげには有利なクラスだろう。

ポジシヨン的にはダメージディーラー、通称DD。効率よくクラスを上げるのに必須のクラスだ。

βテストで経験したことのあるディソーダーを選ぼうとした時、少しだけ胸に痛みを感じた。

この選択はきつと「死」に近づいている。

それでもクラスをかえることはしなかった。

クラス「ディソーダー」に決まりました。

全ての選択が終わり、チュートリアルをパスすると始まりの街トスカーレに降りたった。

βテストでは、死ぬとここに戻されたものだ。

そして、周りの視線が俺に集まっている。

「おまえ、死んで復活したのか？やっぱ現実で死ぬって嘘か!？」
近くの男が聞いてきた。

「いや、今来たところだ。」

周りの人々の落胆が伝わってきた。

「自殺志願者か・・・。8人目だ。」

「俺は人を探しにきた。死ぬつもりはない。」

周りから変人を見る目で見られている。

「二刀流って死にたがりクラスじゃねえかよ。」

その通りだと思ったが、今はそんなことはどうでもいい。

まずは、冒険の下準備をしよう。

俺のレクチャー通りなら姉さんはもう隣の街に行ってるはずだ。

準備は万端で

始まりの街には2種類の人間がいた。

このゲームを開始している人たちと、時間を止めてしまっている人。

普通にダイブインしてデスゲームを迎えていたら俺はきっと状況を理解できず立ち止まっていただろう。

俺は姉さんほど強くないから。

今は姉さんを探すという目的がある。そして、クリアする。

このトスカーレという街は気候も温暖で住みやすく、農業系のクラスには最適の街だ。

止まっている人達もきっと生きていけるだろう。

クラフト系のクラスで活動を開始している人達もいる。

こういう人達がいないと俺達戦闘系クラスは何もできないからなるべく早く製造を頼める知り合いが欲しいところだ。

しかし、今はクラスが育ってないから対したものは作れないだろう。

こういう時はギルドに限る。

――。

「よお兄ちゃん。ここは鍛冶ギルドだぜ！今日は何か用かい。」

街にはAIで動いているノンダイバーキャラクター 通称NDCが溢れている。

なかなか賢くて十分に話ができる。

「ああ 騎士系の片手剣が欲しいんだけど。」

「騎士系ねえ。予算は？」

このゲームでは開始時に1000リルのお金が貰える。

その財布を開いた時にまた胸の締め付けられるのを感じた。

この街でひたすら時を待つ人達はこれだけで生きていくのかと。空腹感というやつはなかなか厄介だ。

だが、俺もまた姉さん以外を気にするほど余裕がない。

逆に明日には死んでるかも知れない。

「800でいいのがある？」

「それならこれだ。「ハイフォンソード」720リルどうだい？」

「じゃそれで。あと、この初期武器買って。」

「まいどー。そっちは12リルな。」

基本的には武器は作って貰った方がステータスUPやら追加効果があるものができることもあるのでいい。使いやすく加工もお願いできるしな。けど今はクラランクも低いし素材も全然無いだろうからそれは諦める。

最初のうちは、お手軽ちよい高いギルドで購入が吉だ。

防具はあたらなければどうということは無い精神。

そもそもデイスオーダーは軽装装備しか使えない。

たいして性能かわらないしな。それに、初期防具のシックなグレイが好きだったりもする。

回復とかのアイテムは高いので買わない。

ゆくゆくはもしもの時のために一個は持っておきたいけどな。

食事は買っておかないとな。

ネットで見つけた噂によれば限界まで空腹感を上昇させるとその場に倒れ、二時間以内に食べないと死ぬらしい。

βの時に試してみようと思ったが、あまりの空腹感に靴を茹でて食べようとしたあたりで断念して食べ物を買った。

あれは本当にやばい。

実験の観察をお願いしてた女の子のプレイヤーが肉に見えたぜ。食事くれなかったら食ってたな。

それはおいといて、スキルをセットしよう。

クラスごとに選べるスキルは決まってる。

クラスがあがれば選べるものも増えるし、スキルを磨けば上位スキルとか新しいスキルを覚えることもある。

俺のオススメはフロントステップと受け流しかな。

組み合わせれば、接近が格段に安全に行えるパリィになったりもする。

すれすれを弾きながら懐に入って攻撃できるからダメージUPも期待できる。

体術スキルは便利だけど、初期のクラスランクでは2つまでしかセットできないしな。

戦闘に関する準備はできた。

ここから姉さんが行く可能性があるルートは3通り。

水の街エルディラか科学都市カルム、魔術学園ミームル。

情報を集めるとしよう。

――。

準備は万端で（後書き）

書き方の下手さに困っております。こうしたらいいよ！などのアドバイスありましたら是非是非、感想などで教えてください。

再会

情報収集と言ったがどうすればいい……。

姉さんの知り合いが都合良くいると思えないし、そもそも俺は姉さんのLL上の名前すら知らない。

そんな風に悩んで歩いていると声をかけられた。

「かなた？」

「えっ？」

振り向くと赤のコートを着こんだ赤毛の男がいた。

銀のモノクルがしぶかっかしい。

「ヴェル?!」

「来ちゃったんだね。プレートに名前が無いから少し安心してただけど。」

そいつはやっぱりベルヴェルクだった。

それにしても、種族はウォールフ族のようだがワイルドさが微塵もない。

狐系のふさふさ尻尾が可愛すぎる。

そして、いい人オーラが出すぎているほっそりイケメンさんだ。

ちなみに、プレートというのはメンバープレートの事で、始まりの街に置いてある石碑の事だ。

ダイブインしてる全ての名前が書き込まれ、ダイブアウトすると白文字のそれが黒にかわる。

デスゲームになった今では生死が確認できる意外の意味は無くなった。

「まあな チェイサー 後追いつてやつだ。」

情報収集をしていて知ったのだが、デスゲームになり、ダイブイン時に注意書きがでるようになってから来た人間が8人いたらしい。つまり、俺が最後だったわけだが、その8人を「自殺志願者」^{リベングデッド}または「後追い」^{チェイサー}というらしい。

死んでいるのに生きているのと生きているのに死んでいるのをかけるなんてなかなか皮肉が効いている。

どうも後者の方は俺が語源の様だが、追跡者とはひどい言われ様だ。

「そうなんだ。何を探しに来たの？」

「名前は知らないけど家族なんだ。」

「そっか。クリア目的なんだね・・・。」

「ヴェルだつて弓を担いでるとこ見るとそうなんだろ。」

「生きるためにココにいるんだよ。」

貧困に喘ぎたくないという意味だろうか。

「リルとか食材目的ならいつでも言ってくれよ。LL売ってもらった借りはしっかり返すからさ。」

「じゃ早速、街の外でゴ布林狩りでもしようか。」

姉さんのことも気になるが、簡単に死ぬ人じゃないし、最終的に目指す場所是一緒だ。

まずは、クラスをあげ、行動範囲を広げなければ会えないだろう。

そう思うことにした。

「しかし、ここらへんは今混んでるだろ？」

「穴場があるんだ。」

ヴェルはこういうのを見つけてくるのが得意だった。

落ち着いた人で優しく気が利く優男感がありながら頼れるお兄さんなのだ。

β の時からもてだった。

そして、 β 時代からの俺のコンビ。

今日の稼ぎは期待できる。

恐怖との対峙

トスカーレの周囲には掘りが巡らされ城門からしか出ることができない。

そして、城門から外に出るとアスガル草原が広がっている。

高い木もなく見通しが良い低レベルダイバー向けの地形だ。

だから予想通り、ウサギやカニの敵とダイバーの激闘がそこかしこで起きていた。

この敵の絶滅に近い状態ではなかなかクラスランクをあげることが出来ないだろう。

「ヴェル。アスガル内じゃないのか？」

「うん。ランスロットの森にある湖の周りにゴブリンの巣があるんだ。」

「湖なら多少は見通しがいいのか。」

「そうだね。ゴ布林に囲まれるってことはないと思うよ。」

それなら安心だ。アスガル草原の狼やランスロットの森のゴブリンなどはダイバーを見つけると攻撃をしかけてくる危険な敵だ。おまけにゴ布林は仲間を呼んだりするから危うい。

「じゃ行こうか。」

「あいよー。」

「ー」。

ヴェルの案内のおかげで敵に襲われることなく湖についた。

「準備はいいかい？」

ヴェルは弓に矢をつがえて微笑みかけてきた。

「惚れちゃいそうだな。」

ハイフォンソードを右手に、サーペンダガーを左手に構える。

「ははっ。照れちゃうね。」

ヴェルが近くの一匹にいるゴブリンに向けて矢を放つとゴブリンの右眼に突き刺さった。

ゴブリンが悲痛で怒りを含んだ咆哮をあげる。

怒りで血走った左眼が敵を探している。

そして、俺と目が合った。

「グウオッフ！」

右手に棍棒を構え走ってくる。

左手のサーペンダガーで受け流し、懷に飛び込むパリィから右手のハイフォンソードで袈裟斬りに繋げるチャンスだ。

棍棒を振り下ろしてくるのが見える。あの一撃はレベル差がある今、当たれば俺のほとんどのHPを吹き飛ばすだろう。クリティカルが直撃したら一撃死かもしれない。

そして、棍棒は俺の目の前を通り過ぎ、土を抉った。

敵が目測を誤ったわけではない。

俺自身が仰け反って座り込んでいた。

フルダイブ式のゲームによくあることだが、恐怖で下がりたいたいという思いが行動になってしまうという現象だ。

こういう自体なのに俺は落ち着いていると思っていたが、十分に恐怖を感じていたらしい。

「かなた！」

ヴェルが続け様に矢を放ちゴブリンの身体をハリネズミにする。

ゴブリンのHPが3分の2無くなっている。

ゴブリンは再び怒りを目に浮かべヴェルに向かって突進をかけた。肩からのタックルに対しムーンサルトで敵の後ろに回り込みつつ

取り出したナイフを背中に叩き込んだ。

かえしのついたそれは簡単に抜けなくなっている。

「かなた！隙を作るから構えて！」

「おっおう！」

ヴェルがナイフに繋がる魔力でできたワイヤーでゴブリンを引き倒した。

仰向けに倒れガラ空きになった胴にダガーとソードの連撃を叩き込み、ついにHPバーを消失させた。

ゴブリンバンディットは倒れた。

ゴブリンバンディットから324リル入手した。

ゴブリンバンディットは鉄鎧を落とした。

ディソーダーランクが3になった。

ぐれんげき
紅蓮撃を修得した。

コンセントレーション
知覚加速を修得した。

ステータスポイントを2入手した。

・・・

「かなた。今日はここまでにしようか。」

「いや、3分待ってくれ。カップ麺ができる前に復活するからさ。」

「焦ることないよ？」

「優しくすぎるなよ。惚れちゃうぜ。」

「それは光栄。」

右手が円を描きながら胸に、足をひいて頭をさげるなんとも紳士なお辞儀の仕方が似合ってしまう優男だ。

それから3分たち、ゴブリン狩りを再開したが、調子がでないまま5匹倒したところで心配そうなヴェルのお願いをきき街に引き揚げた。

暗い夜に

デスゲームの初めての夜。

俺が一番安い宿を利用した。

そして、驚愕する。

宿の受付の前にちょっとした食事ができる食堂があり、βテストの頃はおぼちゃんNDCが作ってくれる塩辛いシチューにお世話に
よくなったものだ。

その懐かしい味を確かめに個室から食堂に降りてきたときに気づいてしまった。

食堂にはまさに老若男女が溢ろうにやくにやんこれている。

小学校に入ったばかりと思える少年から、老後のちょっとした楽しみとして始めた感じの老婆まで。そして、それぞれが食堂の張った雰囲気を出していた。

誰もが「こんなことあるわけない。」とつぶやいている。

姉さんはこの人達の為にきつと今も戦っているだろう。

俺にはできない。

「キューブラーロスの否認という状態だね。」

いつのまにかヴェルが後ろにいた。

「なんだそれ？」

「人が死を受け入れるまでの過程だよ。彼らはまだ幻実げんじつを受け入れられてないんだね。現実の終わりを認識できず、まだ続いてると信じているんだ。生きながらの幽霊ゴーストだね。」

「ヴェルは受け入れたのか？」

「たいして変わらないじゃない？ここもあそこも。目の前にあるのがゲンジツだよ。」

「俺も幻実を受け入れない人間だ。姉さんを連れて帰る。」

さっきまで散々と恥を見せつけてしまった相手に言うのはさらに恥ずかしい言葉だった。

俺の中身はここでうずくまっている人間だ。

「そっか・・・。」

そんな俺にヴェルは悲しそうな顔をするだけだった。

「確かに俺はただの自殺志願者^{リビングデッド}かもな。ここに来たときから死に向かっているのかもしれない。」

「じゃあ、ここで生きよう。そのために戦おう。」

――。

姉さんを守るといふ目的を失うことになるかもしれないその提案に俺ははっきりと同意することを躊躇った。

それでもそうしないと生きていけないこともわかっていた。

だから、姉さんのためにいまは生きる。そう心に言い訳をした。

昼間の激闘 交渉術編

2日目の朝が来た。

夢を見ていた気がする。

それが昨日本当にあったことだと認識できたのは机に置いてあった傷だらけのダガーを見たからだろう。

手に握ってみると昨日よりも軽くなっている気がした。

STRのステータスが上がっただけでなく、馴染んできているという感じた。

身体は先に今を受け入れてるのだろうか。

「ここは身体も心の一部だからね。心が受け入れてるんじゃないかな。」

「エスパーか！」

「残念ですが口から出ていましたよ。」

朝食を持ってヴェルが入ってきていた。

「NDCが扉の前で困ってたよ。起きてこないから。女の子を困らせちゃ駄目だよ？」

NDCのくせに不器用な芸達者だな。と心の中でそいつにつっこんでおいた。

「それにしてもだいぶ消耗してるね。そのダガー。」

「初期装備だしな。」

「新しいの買いに行こうか。そろそろ寝ずに鍛治を頑張っている人達が特殊効果ついた武器作ってるんじゃないかな。」

「そうだな。バザーに行くか。」

――。

ご飯を食べてからトスカーレのバザーに来た頃には昼過ぎになっていた。

なかなかの混みようだ。

「どんなのがいいの？騎士剣二刀流？刀？ダガー？」

「刀は無しかな。サムライ系のクラスはやる気無いから。」

「じゃ攻撃の剣か防御の短剣だね。この世界じゃ防御かな。」
遠回しな優しさがわかる。

根性無しなおまえには防御がお似合いだ！と代わりに自分で言うておいた。

使えそうなダガーを探してバザーを見てまわっていると面白いものを見つけた。

一枚のカードから火がでている。

カードが燃えているわけではない。

カードの真ん中から火炎系の魔法が吹き出ている感じだ。

「マジックカードいかがですか！。」

バザーではダイバーがお店を運営している。

交渉で根切りも可能というわけだ。

「あのカードが気になるの？」

「面白そうだよな。」

「料理でもするの？」

「それもありだが、戦闘でも使えるんじゃないか？」

「投げつけて発動するものじゃないからなかなか難しいかもね。と
りあえず買ってみたら？」

「そうだな。てんちよー！」

「はいはい何でしょう？」

「そのカードって属性何種類あるの？」

「火と水の初期魔法がセットされてますよ。」

「魔法が封じられる使い捨てカードってことか？」

「ええ、そのようです。私もカードを買い取ってソーサラーに魔法を入れて貰って売っておりますので。おっと、但し初級魔法しか入れられないみたいです。中級をいれたら破けてしまいました。大損です。」

「いくら？」

「一枚80リルです。」

「高い！」

「元手がかかっておりますからね。」

「50リル！」

「そこのかた！マジックカードいかがですか？」

「全部買うから！」

「かなた！？ヴェル驚愕！」

「・・・。火と水10枚ずつ全部で1200でどうでしょう？」

「1100だ！ダガーが買えなくなったら元もこもない。」

「仕方ないですね・・・。」

こうしてマジックカードを20枚手に入れた。

ダガーは50リルで鍛冶師に修理してもらった。

さてと、再びランスロットの森に行くでしょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2332ba/>

ラストライフ・オンライン

2012年1月12日20時53分発行